る。時も時、このときの感銘を私は終生忘れ得ないことであらう。顧みれば昨年六月七、八日、皇軍の奇襲上陸以來滿一ヶ年、本書の著者はその時の感激を靜かに抑へつゝ克明な記述の筆を進めてゐるのである。北洋に對する吾人の關心は米英に對する鬪魂と共に、かゝる悲喜兩面を通じて昂まり行くのである。

戰ひ正にたけなはなる日米兩國の間に、汪洋として横たはる太平洋、その太平洋は南に擴がり北に狹い。太平洋の兩岸大陸が呼べば答へんばかりに近接した所、それがベーリング海に外ならない。また、今や只の氷海としての存在に止まらなくなつた北氷洋が我等の太平洋と息吹き交はすところ、それがベーリング海である。してみれば、この海域には何か獨特の性格が潜むであらうことは想像に難くない。

本書の第一章は、ベーリング海とこれを繞どるアリューシャン列島、アラスカ、シベリヤ及びカムチャッカの概觀である。そこにはベーリング海といふ海を指示する言葉を借りながら、この北邊を海と陸との融合された統一あるものとして採上げてゐる著者の態度が窺はれる。第二章は北太平洋に於ける白人侵略史で、アラスカの賣却を轉機とする露國の後退、これに代る米國の進出、その間隙を狙ふ英國等、北洋に生滅する雲霧にも似た歐米列强消長の姿を詳細に描き出してゐる。最終の第三章に至つて、世界轉換期におけるベーリング海の意義が考察せられる。それはアラスカの軍備と睨み合せて米國の對日侵攻路としての檢討となり、またソ聯の北極航空路及び北氷洋航路の開拓と相俟つて、茲は北太平洋の十字路とも考へられてゐる。更に、わが北洋漁業の活舞臺としても重要な意義を擔ふのである。

北洋に關する文獻は目下のところ比較的少いと云ひ得よう。その中にあつて、眞摯な著者は卓見を披瀝しながら詳細な事實の記載にも勞を惜しまず、豐富な內容と流麗な筆致は地圖及び口繪と相俟つて、この方面に對する吾人の關心に充分應へ得る好著たらしめてゐる。著者は序文に於て「國民教養の一端に資せんとする」意圖の下に執筆したと謙遜して居られるが、卷末には參考書十數册を掲げ、短いながらその解說をも附記せられてあり、一般人のみでなく地理學專攻者にとつても好適の參考書として敢て一讀を薦めたい力作である。（昭和十八年二月、目黑書店、B6版一五四頁、定價壹圓貳拾錢）（三上正利）

ラングーン・カルカツタ（新世界叢書）

淺井得一著

印度に關する圖書の洪水の中で、淺井得一氏の數篇の著作は正に激流に抗する雄々しき樹木のやうな觀がある。その樹木は決して背高くはないし、又頑强な太さを持つてゐるものでもない。然し乍らその根强さと溢れ出づる火の如き熱情とは、如何なる激烈の奔流をも自己の指し示す方へ向はせずば熄まぬ氣魄を表してゐる。世界地理政治大系の一册として「印度」をものし、異色ある卓見を以て印度に就いての俗說を打破した著者が、尙も迷蒙醒め難きものへの彈丸として精魂を傾けた逝りが、此の「ラングーン・

カルカッタ」の一篇であらう。ここにあつても著者の烈々の氣概は讀む者の胸を搖り動かさずにはをかぬのである。

著者はその序文の最初に、「内容は單なる物語や地誌ではない。私は之を思想の戰ひの一つとして書いた。」と述べてゐるが、此の戰ひの意識こそは、眞劍勝負の心境であり、それが讀者の心を深く感動せしめる所以であらう。更にその感動を強めるのは著者が此の原稿の執筆直前に陸軍司政官に選ばれ、自ら眞の姿を探求しつゝあつた土地へ赴いた事である。「緊張の中にも心中自ら樂しさの湧き上るのを禁ずることが出來ない」とは、小敷實繁教授の指導のもとに、實踐的性格を有する地理學を學び、更に「この實踐を主張者自らの行動にまで及ぼすべきものと考へて」ゐた著者の僞らざる歡喜の聲であつたであらう。事實個人的に著者を知るものはその決死の覺悟の中に愉悦を漂らせてゐた出發を思ひ起すのである。その後、運輸の都合でマライ半島の一角に釘付けにされた著者が一時も早く現地に到着し度き一念から、陸路峻險を分けて日本人最初の(但し軍人以外では)徒歩入緬者となつた事を風の便りに耳にするに及んで、著者の健在を喜び、本書の出版を待たずして勇躍出發した著者を偲び度い。

此のやうな背景を持つ本書は決してしかつめらしい著述ではない。より多くの人々に愛讀さるべき魂の書であるとさへ言へやう。讀者は本書を通じてビルマ、印度洋、印度に對する確實な認識の基底を得るであらうが、更にたまたまそれ等の地域を研究の對象とし、その土地を通じて著者の到達した、誠の精神を味ふべきであらう。

正に之は袴を脱いだ地政學の書である。打ち寛いだ印緬研究の書である。それでゐてそれは巧まざる名優の演技と同じく、あらゆる資料を馳驅した深奥の研究より出でながら、少しもそれを誇示しようとせず、逆に出來るだけ愼まやかにその努力を内に祕めんとする傾向さへある。だが全體を通じて見逃してはならぬ大きな含みは印度洋作戰と相呼應するラングーンよりカルカッタへの進擊を暗示してゐるといふ事であらう。そのやうな含みが確に本書の構成の根柢を爲してゐるやうに感ぜられるのである。

憧れの現地で今度は資料を通じてではなく現實を通して、益々その研究を深めつゝある著者の健康を遥かに祈り、直接にその結論が實踐に移されるだけでなく、發表の可能な範圍内のみであつても後進に役立たしめる意味に於いて、更に新に筆を起されん事を望み度い。(昭和十八年六月、目黒書店、B6版、一二五頁、定價壹圓)(村上次男)

日本原始纖維工藝史

杉山壽榮男著

日本の石器時代を研究する人々の間で、著者杉山氏は、工藝的見地から多年考察を進められてゐる特殊な學徒である。曩にものせられた『日本原始工藝』、『原始文様集』及び故喜田貞吉博士と共編の『日本石器時代植物性遺物圖鑑』等は、其の點で石器時代文化の闡明に他と違つた寄與をなしたものであつたが、今回、更に多年の研究を取纒め、多數の圖版を加へて本書の刊行を見たこと